

# 偽りの記憶の生起にイメージの体験様式が及ぼす効果

澤, 聡一  
九州大学大学院人間環境学府

田嶋, 誠一  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/899>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 4, pp.149-156, 2003-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 偽りの記憶の生起にイメージの体験様式が及ぼす効果

澤 聡一 九州大学大学院人間環境学府  
田嶋 誠一 九州大学大学院人間環境学研究院

## Effects of manner of imagery experiences on false memory creation

Toshikazu Sawa (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Seiichi Tajima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study investigated the effects of imagery experiences on false memory. Results didn't indicate the effects of using imagery recognized in previous studies, nor the distinction between observing viewpoint and experiencing (acting) viewpoint imagery instruction. It is necessary to examine the validity of stimulus, and the manipulation of manner of imaging (this study investigated the viewpoint) cost high cognitive loads. Otherwise, the effect of individual differences of imagery experiences was suggested: the less frequent daily-image activities, the more confused conviction of past events. "Source monitoring theory (Johnson, Hashtroud, & Lindsay, 1993)", a theory about false memory creation, couldn't explain this. But theory about manner of imagery experience (Tajima, 1987; 1996) can. That is, a person oriented internal experiences is more sensitive to distinguishing internal representation (e.g.: memory, and imagery) because of his sensitiveness. It is necessary to examine the reliability more, but this study would show the importance of the theory of imagery experiences.

**Keywords:** false memory, imagery experience, viewpoint, individual difference

## 問 題

近年の心理学における主要なテーマのひとつに、偽りの記憶（虚偽記憶：false memory）の問題がある。実際には体験していない（もしくは呈示されてない）出来事ないし刺激を、実際に体験した（呈示された）と誤って判断してしまうこの現象は、単語リストの記憶に関するもの（Freyd, & Gleaves, 1996; Intons-Peterson, Rocchi, West, McLellan, & Hackney, 1999; Lindsay, & Kelley, 1996）から生活エピソードの記憶に関するものまで（Hyman, Gilstrap, Decker, & Wilkinson, 1998; Loftus, & Mazzoni, 1998; Pezdeck, & Hodge, 1999）広く認められている。

この偽りの記憶に関連して、数年前に主に米国で大きな社会的問題となったのが心理療法の過程で「回復された記憶（recovered memory）」の問題である。客観的事実に基づいているのかどうか定かではない「回復された記憶」によって数多くの訴訟や家庭崩壊といった悲劇が生じ（Gudjonsson, 1997; ロフトス・ケッチャム, 2000; 高橋, 1997; Lotus, 1998）、心理療法のあり方そのものにも大きな課題を投げかけた（飛鳥井, 1998; Lindsay & Read, 1994; ロフトスら, 2000）。

一方で、偽りの記憶ないし回復された記憶の問題への直接的な対応にはさまざまな困難があると思われる。す

なわち、心理療法の過程においてはイメージないしファンタジーの取り扱い是非常に大きな意味をもつと考えられている。ユングやフロイトらの深層心理学的視点やイメージ療法（レビューとして、松本・濱田・中山・田嶋, 1998）の立場からはもちろんのこと、このほかにも近年盛んな社会構成主義の立場に立つ理論もまた自分自身についての「物語」を再構成するという視点をもつ（エプストン・ホワイト, 1997）。また、もっとも効果の実証性に重きをおいている認知行動療法の立場に立つ理論においてもイメージや信念を扱う技法（Wolpe, 1958; Beck, 1976）の重要性が広く知られている。このように、心理療法におけるイメージないしファンタジーの使用には、ある種の必然性すら存在するといえよう。

偽りの記憶を容認するような心理療法家の姿勢そのものが問題であるという高橋（1997）の指摘から心理療法家が学ぶところは数多いだろう。しかし上述のように、心理療法の過程において、心的現実にもつながる偽りの記憶それ自体の生起を完全に無くすということは実際のところ想像以上に困難であると思われる（藤山, 1999; 精神分析シンポジウム, 1999）。むしろより重要なのは、心理療法家が自らのかわりか及ぼす影響について自覚的になるための知見の蓄積であるように思われる。

この意味で注目すべきは、イメージ（imagery）を利用することで偽りの記憶の生起が上昇することを指摘す

る研究である (Garry, Manning, Loftus, & Sherman, 1996; Hyman, & Pentland, 1996; Loftus, et al., 1998)。例えば Spanos らは、誕生時の記憶という (脳神経科学の知見からは) 「ありえない記憶」でさえ、催眠のような特殊な手続きを使わずとも、イメージ誘導のみで想起させることができる、と報告している (ロフトス, 1997)。

このように、不用意なイメージの使用は、たとえ心理療法の側が「偽りの記憶」である可能性について言及したとしても、患者ないしクライアントの側が「偽りだと思えない」と感じてしまう事態さえありえるだろう。一方で、先述の通り、心理療法におけるイメージないしファンタジーの使用には不可避的な側面があり、したがって心理療法の側が自らの用いるイメージの性質について知見を深める必要があると思われる。その上で、偽りの記憶を生起させやすいイメージの性質を臨床的文脈から検討することが重要だろう。

昨今のイメージを用いた臨床実践および研究においては、イメージを知覚や認知などの体験の総体として捉える「イメージ体験」という概念が重要視されている (水島, 1983; 成瀬, 1988; 田嶋, 1987)。イメージ体験に関する実証的な研究 (宮崎・菱谷, 1998) はまだ端緒にすぎたばかりであり今後の展開が望まれるが、理論化の例として注目したいのが田嶋 (1987; 1996) のイメージの体験様式論である。田嶋 (1987; 1996) によると、イメージの体験のされ方 (体験様式) は「心的構え」と「体験的距離」から構成される。前者は対象に対する主体の心的態度、ないし心の準備状態 (田嶋, 1996) を、後者は主体と対象との体験的距離の遠近 (田嶋, 2002) と定義されている。臨床実践の中から生まれたこともあり、その理論化および実証化はいまだ途上であるが、イメージ体験概念の実践面と理論面の統合を志向しているという意味で注目すべき理論と考えられよう。

本研究では、このイメージの体験様式という点から、その偽りの記憶に及ぼす影響について検討する。とりわけ注目されるのは、イメージ体験中の「視点」という側面だろう。代表的なものは、実際に自分がその場面を体験している視点 (一般に「体験的視点」と、自己像がイメージ場面に現れてそれを傍観者ないし観察的に眺めている視点 (一般に「観察的視点」) の区別がある。このような視点の違いを用いてイメージや記憶の研究を行なった例としては、Nigro, and Neisser (1983) や小川・田嶋 (1986; 1987), 杉浦 (1996), 大隈 (1987) などがあり、イメージ体験を検討する際の重要な側面と考えられている。

また、イメージには鮮明性 (vividness) や統御可能性 (controllability) など個人差が大きいことが知られており (菱谷, 1984; 田村・笠井・佐々木, 2001), イメージ体験においてもその個人差が同様に重要になると思

れる。同様に、偽りの記憶研究においても個人差が大きいことが知られており、それらをイメージとの関わりから説明しようとする研究 (Hyman, & Billings, 1998; Hyman, et al., 1998; Loftus, 1997) もある。これらの結果は必ずしも一貫していないが、イメージ体験という概念を検討することで一貫性のある結果が得られるかもしれない。

イメージ体験の個人差 (イメージ体験傾向) に関する研究はほとんど行なわれていないが、筆者はこの点に注目して田嶋 (1987; 1996) の概念を参考に尺度の構成 (Frequency and Controllability of Daily-image Inventory; FCDI) を試みた (澤, 2002)。その結果、日常的な想像活動 (テレビ鑑賞, 読書など) の体験頻度 (FCDI-F) およびそうした活動から頭を切り替える能力 (FCDI-C) に注目することで、イメージ体験概念のうち心的構えの方向性およびその統御可能性を検討することが部分的に可能になったと考えられる。

この側面はまた、偽りの記憶を説明する理論のひとつであり、情報の起源を誤った対象に帰属させる「ソース・モニタリング (source monitoring; Johnson, Hashtroud, & Lindsay, 1993) の混乱」にも関連するだろう。すなわち、想像活動に親和性を持っている (FCDI-F 得点が高い) 被験者はそうでない被験者に比べてイメージを用いる機会が多いと考えられるため、その効果によってより多くの偽りの記憶を生起すると考えられる。同様に、必要があっても頭を切り替えることができない (FCDI-C 得点が高い) 被験者もまた、イメージと記憶の区別が難しいと考えられるため、より多くの偽りの記憶を生起するだろう。

## 目 的

イメージ中の視点 (体験的か観察的か), およびイメージ体験の個人差 (心的構えの方向性, その統御可能性) という側面から、偽りの記憶の生起にイメージ体験が及ぼす効果を検討する。

## 方 法

### 被験者

大学生23名 (男性8名, 女性15名)。平均年齢は24.41歳であった。

### 材 料

子ども時代の出来事リスト Binder, Bischofberger & Thomaier, 1984; Dise-Lewis, 1988; 上林・中田・藤井・北・森岡・生地, 1989; Garry, Manning, & Loftus, 1996; Hyman, Husband, & Billings, 1995などを参考に項目を選定し、予備調査を通じて二種類の子ども時代の出来事

Table 1 本研究で用いたターゲット項目

有名人と握手した 駐車場で1000円札を拾った 夜中にこっそり家を抜け出した 川で溺れそうになって救助された 夜中に救急治療室に運ばれた 窓を手で割ってしまった
---

リスト (Childhood Event List; CEL-A・CEL-B) を作成した。CEL-A および CEL-B は、それぞれ異なる42項目のディストラクタ項目と、CEL-A と CEL-B とに共通する6項目のターゲット項目 (Table 1) から構成されている。CEL を用いて、各項目に示される出来事を10歳以前に被験者が経験した確信度 (1.絶対に経験していない—4.どちらでもない—7.絶対に経験している) を7段階で評価した。

**イメージ教示** 異なる様式のイメージ想起を求めるために、各ターゲット項目を連想させる場面について「実際に自分が体験しているようなイメージ (体験的イメージ教示)」と「自己像を傍観的に眺めるイメージ (観察的イメージ教示)」の二種類を作成した。なお、教示の作成にあたっては小川ら (1986; 1987)、杉浦 (1996)、大隈 (1987) などを参照し、予備調査 (面接法) を通じて教示の妥当性を検討した。

なお、想起を求めるイメージの内容については、いずれのターゲット項目についても、指示される場面そのものをイメージとして想起させるのではなく、そのイメージ想起によってターゲット項目の場面が連想されるという間接的な関連に留めた。たとえば、ターゲット項目が「有名人と握手した」であれば、そのイメージ内容は「有名人と会って、そこで話をして頭をなでてもらった」とした。この配慮は、一つには CEL の本来の目的をカモフラージュすることがあり、一方には被験者に無用な負担を与えないよう、たとえ不快なイメージ場面であっても最後にはうまくイメージ場面がまとまるようにするためであった。

**イメージ体験傾向の評価** 田嶋 (1987; 1997) におけるイメージ体験概念を参考に、筆者が作成した FCDI (澤, 2002) を被験者のイメージ体験傾向を評価するために用いた。FCDI は想像を用いる活動 (テレビや読書などを含む13種類) の日常的な体験頻度 (F次元) と、その活動中であっても必要に応じて頭を切り替える能力 (C次元) を評価する質問紙尺度である。F次元は田嶋の言う「心的構え」の方向性 (内的体験の優位性) を、C次元はその統御可能性 (内的体験から一時離れる) のそれぞれ一部を評価するものと思われる。

## 手続き

CEL-A, FCDI への回答を被験者に求めた二週間から一カ月後に、本実験を行なった。実験は対面式で個別に行われ、各被験者は全体の流れについて「最初に質問紙への回答をしてもらい、その後に四つのイメージを思い浮かべてもらいます。次にそれぞれの場面について簡単な質問紙に回答することで、その体験について教えて下さい。実験者の主な関心は、イメージの思い浮かべ方によってその体験がどのように異なってくるかという点です」と教示された。

次に、体験的な (もしくは観察的な) イメージの想起について説明を行い、不明な点等がないことを確認した後、練習場面の想起を求めた。体験的イメージ教示の概要は以下の通りである。

- ・ここでいうイメージとは、実際には目の前にはないがあたかもそこに実在するかのように何かを感じることで、たとえば起きているときに見る夢のようなものです。
- ・そのイメージには、内容などの点で様々なものがあり、また思い浮かべ方にもさまざまな方法があります。
- ・ここでは、そのなかでも実際に自分が体験しているようにイメージする方法をしてもらいます。あたかもその場に居合わせているかのようにイメージを思い浮かべて体験してください。
- ・目をつぶってリラックスし、最初に子どもの頃の自分、8歳で小学校二年生頃の自分について思いをめぐらせてください。
- ・その子どものころの自分になりきるよう、イメージを浮かべてみてください。単純に視覚的な像だけではなく、子どもの頃の目線の高さの違いや、身体への感じの違い、また周囲の人にはどのように呼ばれているかを想起してください。
- ・練習として、その子どものころの自分が「座って置時計を眺めているところ」を想起してください。見えるものや聴こえるもの、感じられるものなどに注意を向けて体験してみてください。

教示と練習イメージ場面の後、本実験として二つのターゲット項目について体験的な (もしくは観察的な) 教示に基づくイメージ想起を求めた。体験的イメージ教示であっても観察的イメージ教示であってもその内容的な面はほぼ同一であるが、体験的イメージ教示においては「その場において体験しているように」「身体感覚に注意を向けるように」「感情にも注意を向けるように」などを強調した。

それぞれの体験的 (もしくは観察的) イメージ想起の後には、想起されたイメージ体験の評価用質問紙への回答を求めた。二場面についてのイメージ想起およびイメー

ジ評価を求めた後、「別の思い浮かべ方でイメージをしてください」として観察的な（もしくは体験的な）イメージの想起について説明を行った。先の条件と同様に、不明な点等がないことを確認した後、練習場面の想起を求めた。観察的イメージ教示の概要は以下の通りである。

- ・先ほどとは別の思い浮かべ方でイメージを思い浮かべてください。
- ・今度は、映画のスクリーンかテレビの画面のようなものをイメージし、あたかもその出演者であるかのように、そこに子どもの頃の自分を思い浮かべてみてください。実際の自分はそれを眺める観客・傍観者であるかのようにイメージを体験してください。
- ・目をつぶってリラックスし、先ほどと同様に子どもの頃の自分、8歳で小学校二年生頃の自分について思いをめぐらせてください。
- ・スクリーンを思い浮かべ、次に子どもの頃の自分をそこに登場させてみてください。
- ・練習として、その子どものころの自分が「座って置時計を眺めているところ」をスクリーン上に想起してください。スクリーン上から聞こえてくる音や、他に画面に映っているものに注意を向けてみてください。

説明及び練習場面の後、本実験として二つのターゲット項目について観察的な（もしくは体験的な）教示に基づくイメージ想起を求めた。先述のように、観察的イメージ教示であっても体験的イメージ教示であってもその内容的な面はほぼ同一であるが、観察的イメージ教示においては「子どもの頃の自分を眺めているように」「スクリーンからの映像や音として注意を向けるように」などを強調した。

なお、残された二項目のターゲット項目については統制条件として用いた。その後、「CEL-A と異なる項目から構成されています（実際には6項目のターゲット項目が共通して含まれている）」と教示して CEL-B への回答を求めた。

## 結 果

CEL-A および CEL-B における各項目内容について、「絶対に体験していない」を0点、「絶対に体験している」を6点としてその確信度を評価した。そのうち、CEL-B (post 評定) のターゲット項目における体験の確信度得点から CEL-A (pre 評定) における同一のターゲット項目の体験の確信度得点を差し引き、体験的イメージ教示条件（二項目）と観察的イメージ教示条件（二項目）、イメージ想起を求めないターゲット項目についての統制条件（二項目）のそれぞれについて合計することで、イメージ想起条件別に各被験者の「CEL 増大得点」を算

出した。CEL 増大得点が高いということは、CEL-A 時点では体験したことがないと思っていたにもかかわらず、CEL-B 時点ではより体験したことがあるという方向へと確信度が変動した、と考えることができる。すなわち、CEL 増大得点は偽りの記憶が生じた指標としてみなすことができるだろう。また、補助的な指標として CEL 増大得点の絶対値を「CEL 変動得点」として算出し、同様に偽りの記憶の生起指標として以下の分析に用いた。イメージ教示の及ぼす効果の検討

CEL 増大得点と CEL 変動得点について、体験的イメージ教示条件、観察的イメージ教示条件および統制条件の効果について検討した。なお、CEL 増大得点および CEL 変動得点におけるイメージ教示条件ごとの平均値および標準偏差、中央値については、Table 2 参照。

CEL 増大得点について Friedman の検定をおこなったところ、両条件の間に有意な差は認められなかった ( $p > .05$ )。CEL 変動得点についての Friedman 検定の結果もまた、両条件の間に有意な差は認められなかった ( $p > .05$ )。これらの結果から、本実験においてはイメージ教示条件が CEL 増大得点および CEL 変動得点に有意な効果をおよぼさなかったものと考えられる。

また、先行研究ではイメージを想起すること自体が過去の体験についての確信度を増大させるという効果が認められている。この点について検討する目的で、体験的イメージ教示条件、観察的イメージ教示条件の平均値を「イメージ条件」とした。イメージ条件の CEL 増大得点および CEL 変動得点を同様の手続きで算出し、イメージ条件と統制条件について Mann-Whitney の U 検定をおこなった。その結果、両条件の間には有意な差が認められなかった ( $p > .05$ ) であった。すなわち、本研究にお

**Table 2**  
各教示条件における CEL 増大得点および CEL 変動得点における平均値・標準偏差・中央値

① CEL 増大得点			
	体験条件	観察条件	統制条件
平均値	0.52	0.35	0.30
標準偏差	1.68	2.76	2.42
中央値	0	0	0
いずれも N=23.			
② CEL 変動得点			
	体験条件	観察条件	統制条件
平均値	1.04	1.57	1.43
標準偏差	1.40	2.27	1.95
中央値	1	1	1
いずれも N=23.			

いてはイメージ想起が確信度の増大および変動におよぼす有意な効果が認められなかった。

イメージ体験傾向の効果の検討

FCDI-F および FCDI-C について、中央値を用いて被験者を High-Group と Low-Group に分け、CEL 増大得点と CEL 変動得点に各被験者群が及ぼす効果を Mann-Whitney の U 検定によって検討した。

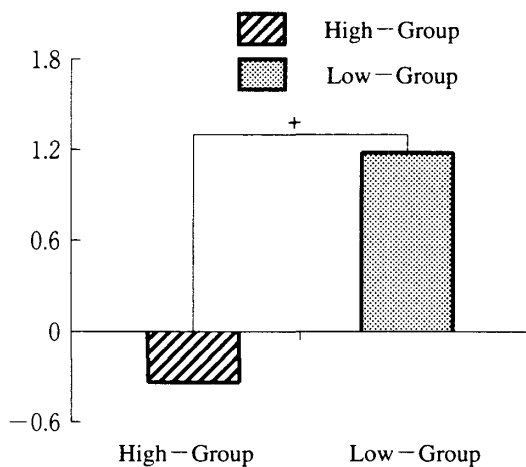
FCDI-F 得点について、High-Group と Low-Group を分ける中央値は Med=31、同様に FCDI-C について Med=

59.8であった。なお、CEL 増大得点および CEL 変動得点における被験者群ごとの平均値および標準偏差、中央値については Table 3 を参照。

各被験者群における CEL 増大得点について Mann-Whitney の U 検定をおこなったところ、FCDI-F について  $Z=-1.80, p<.10$ 、FCDI-C について  $Z=-.22, p>.05$  であった。すなわち、FCDI-F についてのみ Low-Group が High-Group よりも有意に CEL 増大得点が高い傾向が認められた (Fig.1 ; 平均値を示す)。

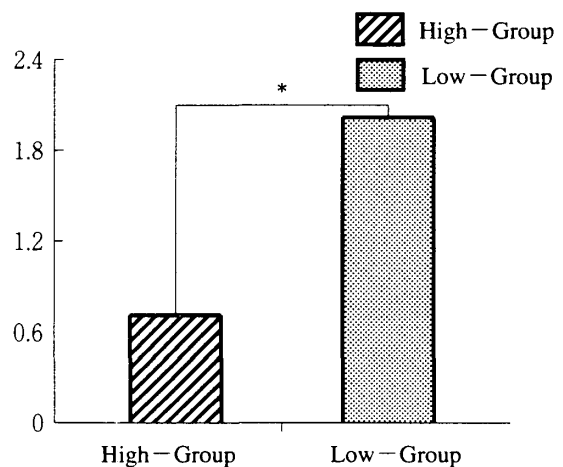
**Table 3**  
各被験者群における CEL 増大得点および CEL 変動得点の平均値・標準偏差・中央値

	FCDI-F		FCDI-C	
	High-Group	Low-Group	High-Group	Low-Group
① CEL 増大得点				
平均値	-0.33	1.18	0.17	0.64
標準偏差	1.35	2.82	1.92	2.66
中央値	0	0	0	0
N	11	12	11	12
② CEL 変動得点				
平均値	0.72	2.03	1.11	1.61
標準偏差	1.19	2.27	1.56	2.19
中央値	0	1	0	1
N	11	12	11	12



**Fig.1** FCDI-F 得点が CEL 増大得点におよぼす影響

+  $p<.10$



**Fig.2** FCDI-F 得点が CEL 変動得点におよぼす影響

\*  $p<.05$

同様に、CEL 変動得点について Mann-Whitney の U 検定をおこなったところ、FCDI-F について  $Z=-2.39$ ,  $p<.05.$ , FCDI-C について  $Z=-.28$ ,  $p>.05.$ であった。すなわち、CEL 変動得点においても、FCDI-F についてのみ Low-Group が High-Group よりも有意に高い CEL 変動得点が認められた (Fig.2 ; 平均値を示す)。

## 考 察

### イメージ教示の効果について

過去の記憶に対する確信度の変化に、イメージ想起の仕方の個人差が影響をおよぼしているという仮説について検討する目的で、傍観者的にイメージを想起するように求める「観察的イメージ教示条件」と実際に体験しているようにイメージを想起するように求める「体験的イメージ教示条件」が各被験者の体験に対する確信度の変動に及ぼす効果を検討した。その結果、過去の体験についての確信度の上昇を示す指標である CEL 増大得点および確信度の変動を示す指標である CEL 変動得点のいずれにおいても、イメージ教示条件が及ぼす効果について有意な結果は得られなかった。すなわち、本研究の結果からはイメージの想起の仕方によって、過去の体験についての確信が変動する、という仮説が支持されなかったといえよう。

本研究で用いた体験的および観察的イメージ教示が確かに体験的なイメージと観察的なイメージを各被験者に想起させていたことが予備調査において確認されている。それにもかかわらず、有意なイメージ教示条件の効果が得られなかったことを説明するには、一つには本研究が一貫して重要視している体験様式論の視点が有効かもしれない。

田嶋 (1987) は、臨床イメージ面接の経験から、体験的視点は体験的距離が近い状態、観察的視点は体験的距離が遠い状態というように、体験的距離の結果としてイメージ体験中の視点の違いが生じると考え、両者を区別した研究を概観している。先行研究においては確かにこうした視点操作が生理的指標などに及ぼす効果が認められているが、それらはあくまで特定のイメージ対象と現在の自分のイメージが距離をとること (小川ら, 1986 ; 1987) や、視点の違いに従属変数として過去の記憶における様式の評価を求める (Nigro, et al., 1983) など、本研究におけるイメージ視点の操作とは質的に異なると思われる状況や研究計画に基づく結果である。すなわち本研究では、第一に実験者の指定した様式で過去の自分を想起するように求め、第二にその状態で実験者が想定した場面を展開するように求めるといふ、先行研究よりも多くの課題を要求し、またイメージ場面の想起に加えて記憶の活性化も求めるといふ意味でより認知的な負荷が

大きいことが予想される実験計画であった。

偽りの記憶にイメージの使用が及ぼす効果について検討した先行研究 (Garry, et al., 1996 ; Hyman, et al., 1998) では、イメージの内容は実験者が操作するものの、基本的にイメージの想起の仕方は被験者の自由に任されている。一方本研究では、予備調査において二つの視点を区別したイメージの想起が確認されてはいたものの、イメージ体験の視点を操作すること自体が他の認知的活動に及ぼす影響までは考慮していなかった。すなわち、通常であればイメージと混同される可能性が高い自伝的記憶であっても、イメージ操作における認知的な負荷が大きいため逆にこれが混同されることが少なかったのかもしれない。そのため、イメージ想起が偽りの記憶に及ぼす効果が消失した可能性がある。関連して、Qualls, and Sheehan (1979) はバイオフィードバックの遂行において、認知的な方略を実験的に操作しようとするのが有害であると指摘している。

ここで仮定している認知的な負荷を減少させるためには、イメージの視点を実験者が操作するという本研究の実験計画に先立って、各被験者が日常的に用いているイメージ想起の視点を考慮し、それが偽りの記憶の生起に及ぼす効果を検討することなどが考えられる。この点が明らかになれば、視点の差異などイメージ想起様式の違いと認知的負荷の関連の検討などが明らかになり、臨床心理援助への知見にも応用が可能かもしれない。たとえば、負荷が小さい方法から導入をはじめ、徐々に効果が大きいと思われるが負荷もまた大きい方法を導入していく、というアプローチが可能になるかもしれない。

### イメージ体験傾向の効果について

CEL 増大得点および CEL 変動得点に、イメージ体験傾向の個人差の一側面を評価すると考えられる FCDI-F および FCDI-C がおよぼす効果について検討した。その結果、FCDI-F の Low-Group > High-Group という関係について、CEL 増大得点には有意な差の傾向 ( $p<.10.$ ) が、CEL 変動得点については有意な差 ( $p<.05.$ ) が認められた。すなわち、日常的な想像活動を体験する機会を相対的に多く持つ者ほど、過去の出来事を体験したことについての確信度が揺らぎやすいことが示された。

この結果は、ソース・モニタリング理論を考慮した本研究の仮説に反する。しかしながら、体験様式論の視点から検討するならば、この結果はある程度納得のいくものかもしれない。すなわち、日ごろから想像を用いる活動に親しんでいるからこそ、記憶とイメージなどの違いに対して敏感である可能性もあるだろう。田嶋は内界志向的構えと外界志向的構えとを区別し、両方の構えの重要性を指摘しつつも、内界志向的構え、とりわけ受容的で探索的なその重要性を強調している (田嶋, 1987)。ただ単に内界志向的構えであれば、想像的活動一般が賦

活されてそれらの区別が困難になるかもしれないが、受動的で探索的であることによって複数の想像的活動を並列的に処理することができるのかもしれない。本研究で用いたFCDIのF次元において、こうした側面が反映されていた可能性を検討する必要があると思われる。

#### 課題と展望

本研究に残された課題としては、被験者数や材料の精錬のほか、イメージ体験の様式と個人差の交互作用について検討を行なわなかった点などが挙げられよう。イメージ教示条件と被験者属性との関連について特定の仮説を持たなかったためであるが、先行研究においては、各被験者にあったイメージ想起の仕方がその効果を発揮するために重要であるとの報告がされている(田村・笠井・佐々木, 2001)。また、Roe (1951; 北村 (1982) より引用) は生物学、心理学、人類学などの諸領域におけるすぐれた研究者について、彼らが思考する際に使用する心像(イメージ)の種類やタイプについて検討し、各学問領域によって用いるイメージの種類に違いがあることを報告している。方法上の課題を解決した後に、これらの点について検討を行なうことで過去の体験の確信度とイメージ体験との関連をより詳細に検討することができるものと思われる。

本研究の結果から、偽りの記憶とイメージの関連を検討するにあたり、イメージ体験という概念が有効である可能性が示された。イメージ体験は臨床実践と実証的研究の両面において現在盛んに検討が行なわれており、今後の展開が望まれる概念である。偽りの記憶やイメージ研究に限らず、イメージ体験という視座を精錬させることにより実証的研究の生態学的妥当性が高まることが予想される。臨床実践におけるイメージやファンタジーの取り扱いにおいても、患者ないしクライアントの中でどのようなイメージが体験されているか、またどのようにイメージを体験してもらうことがその人にとって何が真に有益であるかを考えることができるかもしれない。

#### <付記>

本研究は平成13年度九州大学大学院修士論文として提出した論文の一部を抜粋、修正を加えたものです。貴重なご助言をいただいた針塚進教授に深く感謝いたします。

#### 引用文献

- 飛鳥井望 1998 外傷理論をめぐる最近の論争 精神療法, 24, 324-331.
- Beck, A. T. 1976 *Cognitive Therapy and Emotional Disorders*. International University Press. 大野裕 (訳) 1990 認知療法 岩崎学術出版社
- Binder, J., Bischofberger, A., und Thomaier, K. 1984 Normierung einer Skala zur Messung lebensverändernder Ereignisse. *Social Psychiatry*, 19, 173-180.
- Dise-Lewis, J. E. 1988 The life events and coping inventory: an assessment of stress in children. *Psychosomatic Medicine*, 50, 484-499.
- エプストン D・ホワイト M. 1997 書きかえ療法—人生というストーリーの再著述 ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践 マクナミー S・ガーゲン K. J. (編) 野口祐二・野村直樹 (訳) 金剛出版 Pp. 139-182. (Epston, D. & White, M. 1992 *Therapy as Social Construction*. McNamee, S., & Gergen, K. J. (Ed) Sage Publication.)
- Freyd, J. J., & Gleaves, D. H. 1996 "Remembering" words not presented in lists: relevance to the current recovered/false memory controversy. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 22, 811-813.
- 藤山直樹 1999 心的外傷理論と精神分析 精神療法, 24, 315-323.
- Garry, M., Manning, C. G., Loftus, E. F., & Sherman, S. J. 1996 Imagination inflation: imagining a childhood event inflates confidences that it occurred. *Psychonomic Bulletin & Review*, 3, 208-214.
- Gudjonsson, G. H. 1997 Accusations by adults of childhood sexual abuse: A survey of the members of the British False Memory Society (BFMS). *Applied Cognitive Psychology*, 11, 3-18.
- 菱谷晋介 1984 イメージの個人差に関する研究: その意義と方法論上の問題 心理学評論, 27, 410-429.
- Hyman, I. E., Gilstrap, L. L., Decker, K., & Wilkinson, C. 1998 Manipulating remember and know judgements of autobiographical memories: an investigation of false memory creation. *Applied Cognitive Psychology*, 12, 371-386.
- Hyman, I. E., Husband, T. H., & Billings, F. J. 1995 False memories of childhood experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 9, 181-197.
- Hyman, I. E., & Pentland, J. 1996 The role of mental imagery in the creation of false childhood memories. *Journal of Memory and Language*, 35, 101-117.
- Intons-Peterson, M. J., Rocchi, P., West, T., McLellan, K., & Hackney, A. 1999 Age, testing at preferred or nonpreferred times (testing optimality), and false memory *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 25, 23-40.
- Johnson, M. K., Hashtroud, S., & Lindsay, S. 1993 Source monitoring. *Psychological Bulletin*, 114, 3-28.
- 北村晴朗 1982 心像表象の心理 誠信書房



- Lindsay, D. S., & Kelley, C. M. 1996 Creating illusions of familiarity in a cued recall remember/know paradigm. *Journal of Memory and Language*, **35**, 197-211.
- Lindsay, D. S., & Read, J. D. 1994 Psychotherapy and memories of childhood sexual abuse: a cognitive perspective. *Applied Cognitive Psychology*, **8**, 281-338.
- ロフタス E. F. 仲真紀子 (訳) 1997 偽りの記憶をつくる 別冊日経サイエンス, **123**, 70-77. (Loftus, E. F. 1997 *Creating false memory*. Scientific American.)
- Loftus, E. F. 1997 Creating childhood memories. *Applied Cognitive Psychology*, **11**, S75-S86.
- Loftus, E. F. 1998 The price of bad memories. *Skeptical Inquire*, **22**, 23-24.
- ロフタス E. F.・ケッチャム K. 仲真紀子 (訳) 2000 抑圧された記憶の神話 誠信書房 (Loftus, E. F., & Ketcham, K. 1994 *The Myth of repressed memory*. St. Martin's Press.)
- Loftus, E. F., & Mazzoni, G. A. 1998 Using imagination and personalized suggestion to change people. *Behavior Therapy*, **29**, 691-706.
- 松本明夫・濱田尚志・中山公彦・田寫誠一 1998 日本におけるイメージ研究の動向と展望 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **43**, 89-97.
- 宮崎拓弥・菱谷晋介 1998 イメージ体験のメカニズムに関する研究 (I) — 情動イメージの諸属性が現実感におよぼす効果の検討 — 日本心理学会第62回大会発表論文集, 751.
- 水島恵一 1983 体験的認知としてのイメージの理論 水島恵一・上杉喬 (編) イメージの基礎心理学 誠信書房 Pp.259-300.
- 成瀬悟策 1988 自己コントロール法 誠信書房
- Nigro, G., & Neisser, U. 1983 Point of view on personal memories. *Cognitive Psychology*, **15**, 467-482.
- 小川昭・田寫誠一 1986 観察イメージと体験イメージに関する生理心理学的研究 — 運動イメージについて — 日本心理学会大会発表論文集, 282.
- 小川昭・田寫誠一 1987 観察イメージと体験イメージに関する生理心理学的研究 (2) — 運動イメージ想起時の筋電図反応の一貫性について — 日本心理学会大会発表論文集, 411.
- 大隈靖子 1987 イメージの様式と身体感覚 — “している” イメージと “見ている” イメージ — 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門), **32**, 153-164.
- Pezdeck, K., & Hodge, D. 1999 Planting false childhood memories in children: the role of event plausibility *Childhood Development*, **70**, 887-895.
- Qualls, P. J., & Sheehan, P. W. 1979 Capacity for absorption and relaxation during electromyography biofeedback and no-feedback conditions. *Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 652-662.
- Roe, A. 1951 A study of imagery in research scientists. *Journal of Personality*, **19**, 459-470.
- 澤 聡一 2002 イメージ体験能力が現実感覚におよぼす影響 — 想像的活動における統御能力の検討を通じて — 九州大学大学院人間環境学府提出平成13年度修士論文
- 精神分析シンポジウム 1999 心的外傷と心的現実 精神分析研究, **43**, 235-244.
- 杉浦健 1996 自己イメージの内的・外的視点に対する自己意識の影響について 心理学研究, **66**, 418-424.
- 高橋雅延 1997 偽りの性的虐待の記憶をめぐって 聖心女子大学論叢, **89**, 91-114.
- 田村英恵・笠井仁・佐々木雄二 2001 自己暗示の呈示様式が暗示の体験に及ぼす影響 催眠学研究, **46**, 31-39.
- 田寫誠一 1987 壺イメージ療法 — その生い立ちと事例研究 — 創元社
- 田寫誠一 1996 壺イメージ法の考案とその展開に関する臨床心理学的研究 九州大学教育学部提出学位論文
- 田寫誠一 2002 臨床心理学キーワード第11回 臨床心理学, **2**, 822-824.
- 上林靖・中田洋二郎・藤井和子・北道子・森岡由紀子・生地新 1989 ライフイベント法による児童・思春期精神障害の成因に関する研究 — ライフイベント一覧表の開発とパイロットスタディ — 児童・思春期精神障害の成因及び治療に関する研究 厚生省「精神・神経疾患研究委託費」昭和63年度報告書, 111-125.
- Wolpe, J. 1958 *Psychotherapy by Reciprocal Inhibition*. Stanford: Stanford University Press. 金久卓也 (監訳) 1977 逆制止による心理療法 誠信書房